火を喰つた鴉

逸見猶吉

青空文庫

西蔵は世界の屋根といはれてゐるほどで、国全体が高い山々の連りだ。その山々の中でも群を抜いて高く、西蔵の屋根ともいはれるのが、印度との国境に跨るエヴェレスト山である。その頂上には古い昔から、大理石のやうに硬くて真白な雪が凍りついてゐて、壁のやうにそゝり立つ、そこまで、まだ誰一人攀ぢ登つた者がない。さういふ天の世界にとゞくやうな、空気の稀薄いところでは、あれあれといふ間もなく、千年位の年月が流れてしまふさうだ。だから、エヴェレストは千年も前の出来事を昨夜の夢のやうにして話してくれる。

随分古い昔のこと、エヴェレストのはるか麓に、ラランとよぶ一羽の鴉が棲んでゐた。もの凄いほど暗い、こんもりと繁つた密林の奥で、毎日歌つてる小鳥や仲のいゝ虫などを殺して喰べてゐた。喰べ飽きると、密林の上を高く気侭に飛ぶのが好きで、またその飛行振りが自慢の種でもあつた。ラランの悪知慧は有名なもので、ほかの鳥がうまく飛んでるのを見ると、近寄つては自分の尖つた嘴先でチクリと刺して墜落させてしまふのだ。そして、相手の鳥が下の方へとだんだん小さくなつて墜ちてゆき、見えなくなつてしまふと、その時こそ得意さうに羽を反らして、カラカラと空のまん中で、笑ふのだつた。けれどもあのエヴェレストの頂上だけは、見上げたゞけでも目が眩んで、何度もそこまで飛んで見ようとしては、半分もゆかないうちに、疲れてしまつたラランはゾグゾクしながら、その度に羽を縮めて残念さうに顔をしかめるのだつた。

『癪にさわるけれど、誰か仲間を誘つてやらう。仲間と飛ぶなら楽なもんだ、何か饒舌つてるうちには着くだらうし。』

柄にもなくこんなことを考えて、西蔵に棲んでる仲間の鴉を一々たづねて話したが、皆は日頃ラランの悪知慧をよく知つてゐるので、誰も一緒に飛ばうとするものがなかつた。ラランは不気嫌だつた。エヴェレスト位がなんだといふ顔付で、皆を馬鹿にしたやうに唾をやたらに吐くのだつた。すると一番最後にペンペといふ何も知らない若い鴉が出てきて『そいつはおもしろいな、エヴェレストのてつぺんまでは大飛行だ。僕は大賛成だ。ラランよ。僕でも大丈夫かな。』

『そりや心配無用だ。ではすぐにでも出発しようか。』

ラランはかう答へるや否や、もう、羽をひろげた。ほかの鴉たちはペンペを馬鹿なやつだと思ひながらもエヴェレストの頂上目指して飛びだす元気に打たれた。ラランに続いてペンペがサッと密林の上に飛び出した。やがて羽を整へて、頭を高くあげた。だんだんと下界を離れる。もう千メートルだ。二羽の鴉はそこで初めて口をきいた。

『おい、ペンペ、下界を見ろ。すばらしい景色じやないか。お前なんぞこゝらまで飛んで来たこともあるまい。』

『もちろん僕は初めてだ。こんなに飛べるとは思はなかつたよ。愉快々々。そりやさうと大分寒くなつて来た。ラランよ、エヴェレストのてつぺんはまだ遠いか。』

『ああまだ膝小僧にもとゞいてないよ。さうさな、休みなしの直行で夕方までには着けるだらう。これからが大飛行になるんだ。』

『うう寒い寒い』

ペンペは少し首を縮めた。二千メートルの雲の中だ。ペンペは息をはづませてゐる。

『ラランよ。この雲を出てしまへば、もうすぐだらうな。』

『まだまだ。こんな雲はこの先いくらでもあるんだ。元気を出せよ、元気を。』

『腹が減つてきたんだ。ラランよ、何かたべるものはないか。』

『戯談いふな。三千メートルのまつたゞ中だぞ。辛棒しろ、気の弱いやつだ。』

もう下界を見ても、なにもかもわからないほどだ。初めの元気もどこへやら、ペンペは胸がドキドキする。フト気がつくと、先に飛んでゐるラランが何が旨味いものでもたべてゐるやうな音をたてゝ、喉を気持よく鳴してゐる。ペンペはもう我慢ができないで、

『ラランよ、たべるものがあるなら分けてくれ。ずゐぶん旨味さうな音だ。頼むよ。少しでいいから。』

と、疲れてきた羽にバサバサと力を罩めて、追ひつかうとするけれど、ラランのやつはさつさと先へ飛びながら、着ちついたもので、

『おい、ペンペよ。いまごろ気がついたか。おれも腹が減つてきたので、自分の眼玉を片方抉りだして喰つてるのだ。それにしばらくすると、また元どほりに眼玉がちやんと出来てくるか

ら奇妙なものさ。』

そして格別の味だと言はんばかりに喉を鳴らした。寒さも寒さだが、自分の眼玉がたべられるなんて聞いたので、思わずブルルッと身震ひしたペンペは、さつそく片方の眼玉をたべてみた。なるほど旨味い。いくらか元気も出てきたので、ラランについて上へ上へと飛んでゐた。すると間もなく先にゆくラランが前のやうに喉を鳴らしはじめた。ペンペは気が気でない。『ラランよ、今度は何をたべてるのか。少しでいいから分けてくれよ。腹が減つて僕はもう目が廻りそうだ』

ラランはすまして答へた。

『さういふ眼玉を喰つたまでさ。そのほかに何があるものか。』

馬鹿なペンペは欺されるとも知らずに、また片方の眼玉をたべてしまつた。もう四千メートルに近い霧の中だ。たうとう盲目になつたペンペは、ラランの姿を見失ひ、方角も何もわからなくなつて、あわてはじめたがもう遅かつた。

『ラランよ、ラランよ、』と叫ぶ。

ラランの奴は意地悪く上へ上へとペンペの頭の上を聞こえないふりして飛んでいつた。ペンペはすつかりベソをかいて、繰り返しラランの名を呼んだが、その返事がないばかりか、冷たい霧のながれがあたりいちめん渦巻いてゐるらしく、そのために自分のからだはひどく煽られはじめた。〔ああ、エヴェレストはまだ遠いらしい。〕ペンペは悲しい聲をあげて泣きだした

が、自分の聲を聽いて救ひに來るものも無いのかとおもふと、腹が立つて、頭の中が茫ッとして來た。ラランのやつに欺されたと気づいても、可哀さうなペンペはその抉られた両方の眼から血を滴らすばかりだつた。もうラランの名も呼ばない。羽搏く元気もしだいに減つて、たゞ疲れはてたからだは、はげしい霧のながれに乘つて漂つてゐた。そのとき、ラランの悪はずつとペンペを離れて、上の方を飛んでゐた。ランはフト羽を休めて下を見た。ペンペのからだが黒い小さな點になつて、グーッグーッと錐を揉むやうに下界に墜ちてゆくのがわかつた。やがてそれも見えなくなつてしまつた。ペンペはどうなつたらうか。

『ああ、いい塩梅に墜ちやがつた。自分の眼玉を喰ふなんて阿呆がどこにゐる。ペンペの邪魔さえゐなけりや、もう後はをれのものだ。』

ラランはいつものやうに、カラカラと笑つた。五千メートル。いつもならこの辺へ来るまでに疲れて墜ちてしまう筈なのに、今度は莫迦に調子がいい。けれども鼻唄まじりに頂上を目指してるラランも、ひとりぼつちになると、やつと疲れが出てきた。鼻唄もくしやみになつてしまつた。「エヴェレストは思つたより遠いな」と独言しながら四辺を見廻すと、薄い日の光が美しく妖しく漲つて、夕暮近くなつたのだらう。下界を見ても、雲や霧でまるで海のやうだ。悪いラランも少しばかり寂しくなつてきた。今度こそ腹も減つてきた。すると突然、エヴェレストの頂上から大きな聲で怒鳴るものがあつた。

『ラランいふのはおまへか。エヴェレストはそんな鴉に用はないぞ。おまへなんぞに来られる

と山の穢れだ。帰れ、帰れ。』

山全体が動いたやうだつた。急に四辺が薄暗くなり、引き裂けるやうな冷い風の唸りが起つてきたので、驚いたランは宙返りしてしまつた。そこへまた、何か雷のやうに怒鳴る聲がしたかと思ふと、小牛ほどもある硬い氷の塊がピユーツと墜ちてきて、真向からランのからだを撥ね飛ばした。アッと叫ぶ間もなく、気を失つたランは、恐ろしい速さでグングンと下界に墜ちていつた。

もう夜になつた頃だ。深い谷間の底で天幕を張つた回々教の旅行者が二三人、篝火を囲んでがやがや話してゐた。

『まさか不思議なもんだ。両方の眼玉が無い鴉なんて、どうしたこつた。』

『猟師に撃たれた様子でもなかつたし。』

『でもここいらの岩角に打ちつけられちや、なんぼでも生命は無いにきまつてらあ。』

『そりやさうだ。とにかく可哀さうなやつよ。』

これは多分あのペンペの噂に違ひない。すると元気で正直なペンペも死んでしまつたのか。そんな話の最中にサァーツと音をたてゝ漆のやうに暗い空の方から、直逆さまにこれはまた一羽の鴉がパチパチ燃えてる篝火の中に墜ちてきた。もちろんそれはヱヴェレストの怒りに触れた、ランの気を失つた姿であつた。回々教の旅行者たちはすつかり面喰つて、ランを火の中から引き出したが、やつと正気づいたランは舌の自由がきかないほど、口の中を火傷して

ゐた。カラカラと笑ふどころではなかつた。そこでペンペの話しを聞いたラランは、深く自分の悪かつたことを悔いて、ペンペを葬つてくれた旅行者たちにすべてを懺悔した。翌朝、旅行者たちは天幕をたゝんで北の方に発つた。ラランはそのみにくい姿のまゝ残された。暫くして、ラランはその弱つたからだを南へ向けて、熱い印度の方へふらふら飛んでゐたが、ガンガといふ大河の上流で、火傷した口の渇きを湿ほさうとして誤つて溺れ死んでしまつた。

今でも世界中の鴉の口の中には、その時の火傷のあとが真赤に残つてゐるといふ。人に嫌はれながらも、あの憐れなペンペのために泣いてゐるのだ。

青空文庫情報

底本：「逸見猶吉の詩とエッセイと童話」落合書店
　　1987（昭和62）年2月20日発行
底本の親本：「児童文学　第2冊」文教書院
　　1932（昭和7）年3月10日発行
※片仮名の拗音、促音を小書きする底本本文の扱いを、ルビにも適用しました。
入力：林　幸雄
校正：土屋隆
2008年6月7日作成
2012年1月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火を喰つた鴉

逸見猶吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/